

6年ぶりに集結し全国を巡る『スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR “同騒会”』が終幕！ KANA-BOON、キュウソネコカミ、go!go!vanillas、SHISHAMOが魅せた圧巻のライブと列伝の絆！



All Photos by 藤川正典

株式会社スペースシャワーネットワーク（代表取締役社長：近藤正司、本社：東京都港区）が運営する、日本最大の音楽専門チャンネル スペースシャワーTV。「ライブハウスを中心に活躍するインディーズアーティストを、ライブを通してその魅力を全国の視聴者に伝える」というコンセプトの元、2001年よりスタートしたスペースシャワーTVの主催イベント、「スペースシャワー列伝」が、SPACE SHOWER TV 開局30周年記念公演として「スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR “同騒会”」を開催しました。この企画は、2014年に「スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR」で共演したKANA-BOON、キュウソネコカミ、go!go!vanillas、SHISHAMOが再集結し、2月4日の名古屋公演を皮切りに、4箇所を巡るといふもの。あれから6年。それぞれが実力も人気も、そしてスケールも大きくなった4バンド。もう一度、共に肩を並べ、4バンドの絆と共に全国を駆け抜け、ラストは東京・Zepp DiverCity(Tokyo)で熱狂冷めやらぬまま幕を閉じました。

4バンドのそれぞれの最高のライブパフォーマンスは常にフロアの最高潮を更新し、アンコールセッションでは、なんと、今回のために4バンドみんなで作った列伝オリジナルソングを初披露。彼らの列伝に込める思いや、絆を感じさせる、この絆な計らいにファンも感激。そして、このイベントの様子は3月15日(日)21:00よりスペースシャワーTVにて放送することが決定！つきましては、Zepp DiverCity Tokyoにて2月10日(月)に開催いたしました「SPACE SHOWER TV 開局30周年記念公演スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR “同騒会”」のライブレポートとライブ写真素材をお送りいたしますので、ぜひ貴社媒体で取り上げていただけますと幸いです。ご検討のほど何卒宜しくお願いいたします。



<イベント開催概要>

「SPACE SHOWER TV 開局30周年記念公演 スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR “同騒会”」

■日時・会場

2020年2月4日(火) @愛知 / Zepp Nagoya
2020年2月5日(水) @大阪 / Zepp Osaka Bayside
2020年2月7日(金) @福岡 / Zepp Fukuoka
2020年2月10日(月) @東京 / Zepp DiverCity(TOKYO)

■出演アーティスト：KANA-BOON / キュウソネコカミ / go!go!vanillas / SHISHAMO
■イベント公式サイト：<https://www.spaceshowertv.com/retsuden/extra008/>
■Twitter：@retsuden_sstv
■主催・企画：スペースシャワーTV
<制作> スペースシャワーTV / Livemasters Inc.

最強メンツが集結した、最強のツアーの様相をドキュメントを交えて放送！ /

『スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR “同騒会”』

<初回放送> 3月15日(日) 21:00~22:30 <リピート放送> 3/24(火)23:00~

視聴方法：<http://sstv.jp/howto>

<本件に関するお問い合わせ先>

株式会社スペースシャワーネットワーク メディア本部 メディアマーケティング部宣伝・PR課
TEL:03-3585-3544 FAX:03-3585-3215

<ライブレポート>

スペースシャワーTVが開局30周年を記念して、2014年に開催した「スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR 2014」に出演したKANA-BOON、キュウソネコカミ、go!go!vanillas、SHISHAMOの4バンドによる同窓会ツアー「スペースシャワー列伝 JAPAN TOUR“同騒会”」を開催した。以下のテキストでは、名古屋、大阪、福岡公演を経て、ファイナルとして開催されたZepp DiverCity(TOKYO)の様相をレポートする。「あの日」から、それぞれが別々の道を歩き、悩みや葛藤を乗り越えて再び集結した4組は、この6年間で格段に進化した姿を見せてくれた。

トップバッターはSHISHAMO。SEにのせて、吉川美冴貴(Dr)、松岡彩(Ba)、宮崎朝子(Gt.Vo)が順番にステージに現れると、今年1月にリリースされた最新アルバム『SHISHAMO 6』に収録の「ひっちゃかめっちゃか」からライブはスタート。吉川、松岡が繰り出す黒いグルーヴのうえを、ラップのように言葉を詰め込んだメロディが軽やかに転がる。6年前、19歳だったメンバーは現在25歳。当時は振り返り、「リハーサルで何をやるのかもわからなかった」というほど初々しかった彼女たちも、いまやスタジアム公演を開催するほどのバンドになった。活動を重ねるごとに音楽性の幅を広げ、自分たちのイメージを打ち壊し続けるのが今のSHISHAMOだ。痛快に突き抜けるメロディが“良いことばかりじゃない”日々にも勇気を与える代表曲「明日も」のあと、MCでは、「6年前、KANA-BOONとは全然仲良くなれなかった」と、“超”が付くほど人見知りで有名な先輩バンドをイジって会場を笑わせる場面も。そんな言葉の端々に、2014年列伝組の仲の良さが伝わってくるのも微笑ましい。6年前には歌えなかったような大人っぽいラブソング「君の大事にしてるもの」などを披露して、本編を締めくくったのも、最新アルバムからの「曇り夜空は雨の予報」だった。ステージをブルーに染め、ゆったりと紡がれるメロディには、切なさや狂おしいほど溢れていた。年を重ねることで当たり前に変化してゆく自分たちの姿を決して飾らずに音楽として奏でる。そんなSHISHAMOの軌跡が凝縮された30分だった。

転換中、ステージにシンセサイザーが運びこまれただけで、次はキュウソネコカミだと察したお客さんから歓声があがった。1曲目は、6年前にも披露した「ウィーアーインディーズバンド!!」。当時は現在進行形で「ウィーアーインディーズバンド!!」だった曲だが、メジャーデビュー以降はタイトルを変えて演奏し続けている。続けて、「良いDJ」「メンヘラちゃん」という彼らのライブでは一軍を担う強力なアンセムが連発されると、フロアの熱気は一気にマックスへと達していった。ひたすら地元愛を歌う「Welcome to 西宮」では、ヤマサキセイヤ(Vo/Gt)が何度もフロアにダイブして、お客さんにもみくちゃにされる場面も。思えば、6年前のキュウソは、誰もやらないことをやって爪痕を残す精神でがむしゃらに突っ走るバンドだったが、その爪の鋭さは、6年を経て、変わらないどころか、いっそう鋭さを増していた。さらに、MCでは「僕たちが(4バンドのなかで)いちばん消えるって言われてきたけど、6年間がんばってきました！」と話す。ライブハウスこそ自分たちの生きる場所。そんな覚悟をもって走り続けるライブバンド＝キュウソの全力を叩きつけたステージのラストは、1月にリリースされた最新ミニアルバム『ハリネズミズム』に収録の「冷めない夢」だった。「俺たちの10周年に作った曲だけど、列伝ツアーにもぴったりな気がする」。ヤマサキの紹介で披露されたその曲には、バンドの泥臭い生き様が刻まれている。気づくと、明日もがんばって生き抜こう、なんて思わせてしまう。これが、キュウソが6年間貫き続けてきたステージだ。

「準備はいいかー!? 思いっきり騒げー!」。牧達弥(Vo/Gt)による気合いのこもった叫びを皮切りはじまったgo!go!vanillasは、「チェンジユアワールド」からスタート。初っ端からジェットセイヤ(Dr)がドラム台に立ち上がり、渾身のちからで刻むビートのうえを、牧は、ギターを持たず、ハンドマイクで踊るようにメロディを紡いでいた。6年前から、彼らが抱くロックンロールへの経緯や愛情は変わらないが、今のバナラズはその枠だけにとどまらず、同時代のポップミュージックからの影響も貪欲に取り入れた音楽を鳴らしている。柳沢進太郎(Gt)と長谷川プリティ敬祐(Ba)がステージ際まで歩み出て、これぞロックバンドという華やかなパフォーマンスでも魅了した「カウンターアクション」から、6年前にも披露された「ホラーショー」へ。賑やかな爆音ロックンロールが完全にフロアを掌握する。MCでは、「6年前はまだ俺らのことを知らない人も多かったけど、今日のお客さんの歓声を聞いて、顔を見て、俺たちがやってきたことは間違ってたかと思いましたが」と伝えた牧。6年前に列伝ツアーを経験したことで、お客さんと向き合うことの大切さを学んだという彼らは、あの頃よりも、明確なバンドの意志を持ち、それを伝える術を持つバンドになっていた。最後に届けた2曲は、そんな今の彼らだからこそこのナンバー。同じ時代に生きる同士たちに捧げる「平成ペイン」と、何度も蘇るという不屈の精神を刻んだ「No.999」だった。振り返ると、2014年以降のバナラズは、メンバーチェンジもあり、プリティの交通事故による3人での活動期間もあり、何度もバンド存続の危機を乗り越えてきた。そうやって止まらずに転がり続けてきたバンドだからこそ、説得力をもって伝えられる歌があるのだ。

トリは、6年前の列伝ツアーでも、ツアーファイナルの赤坂BLITZ(現在のマイナビBLITZ赤坂)でトリを務めたKANA-BOON。メンバーの登場と同時に、あの時と同じようにフロアから割らんばかりの歓声が湧きおこると、昨年リリースされた「まささら」からライブが始まった。先日、飯田祐馬(B)の脱退を発表したKANA-BOONは、サポートベーシストを迎えた新体制によるステージだ。「3バンドが燃やしてくれた火をもっともっと燃やしたいです!」。谷口鮎(Vo/Gt)の言葉を合図に、「フルドライブ」や、6年前も演奏した「ないものねだり」といったアップテンポなバンドの代表曲を惜しげもなく披露していく。だが、曲は同じでも、この6年間で巨大なアリーナ会場を埋め、フェスのメインステージに立つまでのバンドに成長を遂げた今のKANA-BOONが鳴らすその威力は当時とは桁違いだ。昔の自分たちだけではなく、現在進行形の自分たちの姿を見せたいと届けた新曲「スターマーカー」は、キラキラとした疾走感が溢れるバンドの真骨頂となるナンバーだった。ラスト1曲を残したところで、「あいつらがいるから、僕らもここまで踏ん張れました」と、かつて一緒に列伝ツアーをまわった仲間とのあいだには特別な絆があることを伝えると、最後はインディーズ時代から大切に歌い続けている「眠れぬ森の君のため」で終演。新たなスタート地点に立った今だからこそ、彼らの原点のひとつである「列伝」という場所で、バンドへの初心を込めたこの曲を選んだ意味は大きかった。

アンコールは、本家・列伝ツアーで恒例になっている、出演バンド総勢16人がステージに立つセッションが行なわれた。6年前は、ここでレミオロメンの「3月9日」をカバーしたが、この日は、今回のためだけに書いたという列伝オリジナルソングが披露された。バナラズ・牧が弾き語りで作ったものを、KANA-BOON谷口が曲にして、SHISHAMO宮崎が作詞した曲だという。“ああ列伝 永遠(とわ)に”と、列伝への愛をたっぷり込めた楽曲は、“合言葉はこの刹那全力で!”というキュウソ・ヤマサキの叫びで終わった。願わくば、10年後、20年後、再び「同騒会」で、この4バンドには集結してほしい。そんなふうにも思わせる万感のフィナーレだった。

(取材・文=秦理絵／撮影=藤川正典)

<本件に関するお問い合わせ先>

株式会社スペースシャワーネットワーク メディア本部 メディアマーケティング部宣伝・PR課
TEL:03-3585-3544 FAX:03-3585-3215

スペースシャワーTVは全国のケーブルテレビ、スカパー!などでご覧いただける、日本最大の音楽専門チャンネルです。